

序

——「診療所診療」において「整形外科的診療」で「患者さんのQOL向上に
貢献する臨床力」を現場の先生方に届けたい——

患者さんのすべての訴えに耳を傾けるプライマリ・ケア医にとって、整形外科領域の学びのニーズが高いことは必然といえます。「診療所に足を運んでくださる患者さんの健康と豊かな生活のために役立ちたい」と奮闘する先生方のお助け本になるようにと、本書を企画しました。

本書を企画するにあたり、自分が自信をもって整形外科診療をできるようになったプロセスを振り返ってみますと、整形外科外来に座り始めた頃は、疾患に関して詳しく記載のある教科書で学べることだけでは患者さんにうまく説明ができず、隣室で診療する先輩医師の説明や声かけに耳を澄ましていたことを思い出しました。

患者説明を1つの技術ととらえますと、習得までにはまず模倣することが最初のステップとされます。模倣を重ねて、自分なりの言葉の選び方を探し出し、最終的には自然と言葉が出てくるようになります。模倣するにはお手本が必要ですが、隣の診察室にお手本があったわれわれとは違い、プライマリ・ケア診療所で一人奮闘している先生には身近なお手本が少ないのが現状です。そこで本書では「患者さんにはどう説明する？」と題して、臨場感のある患者説明文を掲載しております。執筆した先生がふだんのように説明しているか、隣の診察室を盗み聞きするようにお使いください。

本書の特徴として、第1章では「主訴から考えるシリーズ」と題して、罹患率の高い疾患を主訴に診療所に来る患者さんの典型例を示しながら、代表的な主訴に関して解説しています。コモンな疾患は見逃さず診断し、自分でフォローできるか・紹介するかを判断できることに重点を置いています。また、指先足先の外傷（第2章）・小児疾患（第3章）というよく遭遇する疾患等に関しても、診療所でできる限界を考慮し日々の診療に応用可能な内容になっていると思います。

処置（創傷処置一般・ブロック・関節注射・シーネ固定・トリガーポイント注射：第4～5章）は、その手技ができると方針が変わるものを、特別な装置やスキルがなくてもできるように、動画つきで解説しています。



交通外傷診療（診断書や保険制度など）や有病率に比して治療率が低いといわれる骨粗鬆症診療（第6章），診察室内で患者さんからよく聞かれる質問に気の利いた一言を返せるようにコラム（Editor's Eye）も掲載し，痒いところに手が届く1冊に仕上げています。

学術的な深さや疾患の網羅は他書籍に劣る部分ばかりと自認しておりますが，われわれの目的は，冒頭に掲げた，ただ1つ。

本書を手にとった先生方の整形外科的主訴に対する診療が目の前の患者さんの笑顔につながることを，編者一同，心より願っております。

2021年1月

編者を代表して

JCHO 若狭高浜病院 整形外科／臨床研修センター長 海透優太